

昭和初年二月一日 第三種郵便物認可  
平成四年四月一日発行（毎月一回）日発行  
俳句雑誌 沖 第20巻第9号



俳句雑誌[おき]

9  
月  
号

沖  
発  
行  
所

# 躡

# 口

能村 研三

## 二十七回忌

太陽の容赦なき日よ海の日は

土用太郎納屋より出でしオートバイ

遠泳の少し距離おく伴走船

創刊号は八十八人曝書して

本年七月、母の二十七回忌を迎えた。一般的に法事は、特に重要なのが一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、三十三回忌で、この五つは人を呼び盛大に行うと言われている。三十三回忌は「忌み切り」といって、親の法事を子供が行える限界なので一つの区切りになり、それ以降は「遠忌」として次世代や次々世代の人間が行うそうだ。

そんな一般的な考え方は別として母の二十七回忌の法事を行うことにして、親戚に集まってもらうことにした。親戚といっても、父母の代では、母の姉が元気である他は、兄弟、従兄弟である。幸い、能村家は昔から親戚の間柄が円満で、結束も固く、法事などの不祝儀の他にも何かにかこつけては集まることが多かった。これも、父が江戸っ子気質で、人寄せが好きであったことによるものかも知れない。

法事は、本来であれば菩提寺に集まり、墓参りをするのが常であるが、ある事情により、近くの寺の住職に我が家まで来ていただき営むことにした。

朝涼の長身が入る躡口

深川・伊能忠敬碑

爽涼の脚絆や測量出立碑

深川の魂振り神輿盆の東風

盆踊エキストラめき輪に入りぬ

文豪の著作権者のアロハシヤツ

厄日来て結界石の十字紐

我が家は、昔から父の希望で仏間が二間続きの部屋となる間取りとなるため、こうした人寄せも可能なのである。

久しぶりに兄弟、従兄弟が一同に集まれる機会なので、法事を終えてから、市川市内にある父の市川学園句碑、じゅんさい池の「枯野句碑」、国府台の陸上競技場の「春ひとり句碑」の三つをマイクロボスで巡った。従兄弟たちも、これらの句碑の序幕には殆ど列席しているものの、久々に句碑に再会できたことを喜んでもらった。

今回は、母の法事であったが、三つの句碑巡りを出来たことで父を偲ぶことが出来たこともよかった。

能村 研三



# 蒼茫集



杉 涼し

成宮紀代子

タイマー

安居 正浩

立ち並ぶ上杉御廟杉涼し  
かんかん帽茂吉もつとも似合ひけり  
みな同じ蔵王の霧に触れ親し  
ビアジョッキぶつかり稽古の音のして  
淋しさはひとり西瓜を食ぶるとき  
田に水の音無く入る朝曇

タイマーは0に戻せる日雷  
海の日の海を見たくて絵本買ふ  
文豪に無頼の過去やところてん  
タピオカのつぶつぶ数へ暑氣中り  
蟻地獄こころ許せる人と見て  
二歳児の髪柔らかき星まつり

存分に

辻 美奈子

青 き 音

北川 英子

石割れば化石億年前の夏  
六月の木に筋肉のあるごとし  
特急は音なく発車梅雨に入る  
枇杷あまた落して壊さるる生家  
をさな子に眠り湧きつぐ螢の夜  
存分に母親でゐる暑さかな

飛驒路くらたげんさん並くかな青水無月の分水嶺  
羅の縫ひ目真直ぐに透け卒寿  
身の上をほつりと洩らす草ぼたる  
青柿の青き音して落ちにけり  
さめざめと濡れて戻りぬ星祭  
笛一管携へ祭帰省かな

鶉 縄 辻 直美

梅雨晴や朝から鉢巻気分なる  
はたた神ことばは時に火を放ち  
巴里祭も手風琴ほど古びたる  
家族はや鶉縄を捌くほどあらず  
雑巾をしぼり朝顔市とおもふ  
仕舞には戸板に乗りぬ夏芝居

空洞の芯 久染 康子

蚊柱に空洞の芯ありにけり  
空蟬のまだ濡れてゐる前のめり  
アルプスの光背となる雲の峰  
屋根見えて大股歩き盆帰省  
島めぐりの間に海の家建ちてをり  
先頭は産着の嬰の青茅の輪

一 会 遠藤真砂明

みどり子の笑みも一会や新樹光  
師の忌来る竹に五月の艶はしり

蔵王好日峰雲へケーブルカー  
蜘蛛降りてくる一筋のいのち糸  
男の子らに大きな空の初泳  
サーファアの父へ幼き眼の喝采  
石の素顔 千田 百里

葉騒聴く賀茂の七瀬の夕薄暑  
六月の果つや異国ですし食うて  
ぎつしりと雲詰め込んで雲の峰  
葉隠れの気韻泰山木の花  
水打つて石の素顔を確かむる  
浮いて来い竜宮城もういてこい

馬 齡 千田 敬

籐椅子のきしみ具合も馬齢かな  
虹二重ハワイの神は太め好き  
木洩日の径に沿ひゆく蟬しぐれ  
水打てば石の応へる月日かな  
幽霊の役をねぎらふ宿の刀自  
歳時記に句敵も居て明易し

明日死ぬ螢 荒井千佐代

黒南風や弥撒の絵硝子半開き  
明日死ぬ螢明滅の滅長し  
ジャムの蓋火にて緩める芙美子の忌  
梅天やしづかに潮のせめぎ合ふ  
柿の花ちちの机辺より暮れて  
濡らせし指振つてかわかす百日紅

金魚玉 渡辺 昭

大瑠璃や霽れつつ眩し山の霧  
岳麓を雲押ししのぼり牧開く  
酔筆のフアックスとどく金魚玉  
虹の橋孫に故郷となる街よ  
献酬のせはし過ぎぬか露涼し  
はしり蚊を打ちて舌鋒涼しかり

朝顔市 鈴木 良 戈

尺蠖の計る余生の淡きかな  
梅雨ひびく指定されたる患者椅子

癌病歴五年と記され梅雨夕焼  
百回を越す採血や梅雨煙る  
ラムネ飲む青の眩しき空の奥  
晴極む朝顔市の空抜けて  
すぐに朝 大畑 善昭

寝てすぐに朝髭が伸び草が伸び  
捨つるべき書籍を山と積みて梅雨  
ががんぼの脚一本の遺失物  
知らず寄る蜂の臨戦体制に  
人に自死自然死蟬の穴を出づ  
会へば握手の好漢たりき夏の露

振 花 上谷 昌憲

水蓮を甕に咲かせて精神科  
ガラス板担ぎ梅雨空傾ける  
翅よりも影を重たく黒揚羽  
一芸に秀でて金魚掬ひかな  
竹夫人にも加齢臭らしきもの  
振花や議事堂は今がらんどう

麦 星 中尾 杏子

居留地甲二十七番濃あぢさゐ  
一盞のほろ酔夏越の風が知る  
蛇の衣脱ぎ捨てたきはわが身にも  
おろおろと幼な子看取る梅雨夕焼  
嬰ふたり寝落つ麦星ひかるころ

テスト・ラン 河口 仁志

雀の子着地にいまだ前のめり  
長堤の曲れば曲る夏つぼめ  
白南風や朝の帆船テスト・ラン  
泣きやまぬ子は炎帝にくれてやる  
亭主より憎くなけれど毛虫焼く

胸中に 溯上 千津

懸橋は胸中にあり天の川  
百合の香の重し正論・正攻法  
葭簣屏風に悌透くる仏間かな  
墨絵寂ぶ師に賜りし江戸扇子  
盆灯籠出さぬ詫びごと呟けり  
涼しさよ寝支度終へし無為の時

月光 松本 圭司

月光の重さに牡丹散りにけり  
向日葵の黄に海の青退りけり  
奔放にして多感なる白緋  
夏山の天辺に立ち王となる  
大西日ビルの断崖燃え立たす

汗の腕 坂本 俊子

ちらと見し牡丹を切りぬ恋のごと  
生涯は一度切りよ汗の腕  
句集出さず逝きし人あり青葉木菟  
そら豆や登四郎先生思ひむく  
夏草のぼうぼうに入る病める足

箒 木 湯橋 喜美

乗越しの不覚扇を開きけり  
水勢に二転三転築の鮎  
夜蛙が占めて峽の田波打てり  
法螺貝が煽る四万六千日  
箒木のふくらみ夢を捨てきれず

# 潮鳴集



回想

中島あきら

回想のはじめ木苳明かりかな  
紫陽花を鉄壁として尼の寺  
正論のどこか脆くて半夏生  
声とどくところに夫妻袋掛  
悔い半ばかも青梅に紅走り

千樹 掛井 広通

身の芯にさみしさの壺清水飲む  
泉に手浸けて心音透きとほる  
山自身声を発せり山開き  
風音は千樹の声よ山開き  
炎天やグリコの走者静止して

初夏

高橋 ちよ

草の香のやがて水の香はつ螢  
梅雨晴や水平線のくつきりと  
切り抜き之恩師の笑顔朴花忌  
挨拶のたびに掴みて夏帽子  
わが仕種目で追ふ夫にさくらんぼ

螢の夜 東 うた子

振花や踏みさうになるしのび足  
家を貸し生家と呼べず棕櫚の花  
梅を干す出を待つ笹の大小を  
おのづからいつもの道よ夏帽子  
寺領へと小流れ渡る螢の夜



# 沖作品



ビーチパラソル真上に飛行ルートあり  
噴井戸に西瓜の自転ありにけり  
ボート漕ぐ四肢の力を絞りけり  
海境に海月部隊のパラシュート  
千切りの風となりけり青簾  
デイケアの午後の静けさ額の花  
引力に逆らはず逆立ちの汗  
葉脈の路地に迷ひて蝸牛  
居るはずの畑に母みぬ大夕焼  
風を生む青葉大樹の力かな  
祈りの泉ときゆるやかに流れをり  
茂りななか鎧戸放つ神学院  
壁泉の藻の匂ひする夕べかな  
脆座ふとんの片隅に座す早梅雨  
花蘇鉄いつの世もある罪と罰

千葉

鈴木 伸一

東京

七種 年男

長崎

柿本 麗子

# 能村研三選

結うてすぐ解ける子の髪薄暑かな  
草矢打つ自然観察指導員  
星に手のとどかむばかり冷し酒  
紫陽花の昨日の色を探しをり  
梅雨空の異国に象の老ゆるかな  
紫陽花を咲かせて自称晴れをんな  
隣家より貝あらふおと半夏生  
暑を凌ぐ母に雑穀ごはんかな  
飼鳥に饒舌な午後ゼラニウム  
中吊りに西日まみれの模擬家族  
落日へ一艇の切る青葉潮  
火口湖の碧よりあをき朱夏の空  
裏富士を突き抜けてゆくはたた神  
角帽の頃の面影螢の夜  
唐丸籠据糸し三和土を蟻走る

神奈川

鈴木 浩子

千葉

井原 美鳥

愛知

近藤 敏子

小河滋嗣による

# 作品 15句選評

\*

能村研三

噴井戸に西瓜の自転ありにけり

鈴木 伸一

井戸に吊して西瓜を冷やすことは、都会に暮らしては無理な話であるが、昔はそんなことが出来る井戸が残っていた。蓋を外して底を覗くと水が見える。恐らく水温も一年を通して十二、三度で夏はとても冷たく感じる。噴井戸は「生きた水」で常に水が湧き出ている。山から地下の水脈を通って湧き出ている。水が絶えず湧き出ているので、その力で西瓜自身もくるくる自転しながら、その冷たさは万遍なく西瓜全体に伝わった。井戸に西瓜を吊したことを詠んだ句は多くあっても、西瓜の自転ということを見出したことは新しい。

引力に逆らはず逆立ちの汗

七種 年男

逆立ち、文字通り「逆さに立つ動作」。地面に掌を置いて腕を伸ばし両足を宙に浮かせる。上手く行ったためには、ある程

度の腕力に加えてバランスの保持と技術が必要。ここに引力が働くと、折角のバランスも崩れてしまい、足が地についてしまう。何度も何度もこの引力にもめげず逆立ちを繰り返して練習をした。当然運動量が増していくので、体からは汗が噴出している。

一句の中で「逆」「逆」という言葉を重ねて使っているところも面白く思った。

花蘇鉄いつの世もある罪と罰

柿本 麗子

蘇鉄は耐寒性や耐潮性に優れていて、海岸の岩場などに自生して育つ。花蘇鉄は別名救免花とも呼ばれている。流刑の地として知られる八丈島では、この花が咲くと、その年には救免があるとされた。蘇鉄は一見して花とも思えない花で、ひらひら揺れる花びらなどは全くなく、葉に守られるようにして幹の上にとっしりと座っているようなものが花である。蘇鉄の花には長い年月の歩みの中に、罪が許されるヒントが隠されているようにも思える。

結うてすぐ解ける子の髪薄暑かな

鈴木 浩子

小さな女の子の髪であろうか。女の子に、あれこれ髪飾りを変えて髪を結ってあげるのは楽しい時間である。少し成長すると、女の子も嫌がらず髪を結ばせてくれるようになる。小さな子供の髪は、髪質も柔らかく結ってあげてもすぐに解けるのがよい。薄暑の頃、浴衣に合わせて小さな子供に髪を結ってあげられることは幸せな瞬間でもある。

(以下略)